

図書館だより

埼玉県立図書館

'81.10号



読書雑感

私が本に親しむようになったのは、小学校の頃である。家には父の蔵書であったと思うが、日本文学全集や日本偉人伝・小学生全集等があった。私は強制されることなくそれらの本をむさぼり読んだものだ。たとくに面白い内容のものとか、感動を覚えるような本にめぐりあつたときは、学校の勉強の予習、復習をさておいても、夢中で読んだことを今でも覚えている。

私はできるだけ本を読む時間をつくるよう心がけている。この読書する習慣は、ただ単に本がたくさんあったということより、年令に応じた本が身近かあつて、そのうえ両親が読書に親しめるような環境づくりに積極的に励んでくれたお蔭であると思うとともに、社会人となつてからもできるだけ本を読む機会を増やそうと心がけている。かえりみると、若い頃学校に図書室があつたのか、無かつたのか定かではない。現在学校には学校図書館が、地域には公立図書館や他の読書拠点が次々に建設

され、内容も年々充実整備されつつ、巾広いサービス網の中で本と親しむ機会に恵まれているさまは何と幸福なことであろう。

このような世相の中であつても、毎年々々読書週間が持たれている本質的な意義は奈辺に有るのだろうか。テレビの普及で、映像か活字かの論議もあるが、本を読まない人にどうして読ませるかが、今後の大きな問題ではなからうか。およそ本を読ませるための指導は、十歳以上の子供には、大人が選んだ本を与えても良いが、十歳以下の子供、その小さい魂には、文字を読ませるのではなく、多くの文字をきかせることが、将来への読書力をつける基本だといわれる。子供達にはいかに読ませるかではなく、親や周りの人たちがより多く語り、読みきかせることが必要だと思ふ。

子供をとりまく環境に沢山の本を置くことも必要だが、大人たちのこのような心をはぐくむための熱っぽい介添が、一番大切なことだろう。活字ばなれが多くなっている現在私達図書館人の責任は、ますます大きくなつて重くのしかかっている。(N)

全国図書館大会を顧みて

この大会が埼玉県で開かれたのははじめてでしたが、成功のうちに幕を閉じたのでした。秋色さわやかな十月二十九日から三十一日までの、三日間のつどいのおとを、ここに静かに振り返ってみましょう。

明治の精神に学んだもの

大会の幕あけには、幸い自由民権百年目を迎えて、一番ふさわしい色川大吉先生を迎えることができた大変印象的な記念講演となりました。この大会のテーマ「人間性を深める」という主題からしても非常に意義深いお話でした。といひますのは、最近のNHKドラマ「獅子の時代」の筋書を追いつながら、そのスクリーンにみられた、裏方の苦勞、いちは庶民の活動が実際には、この秩父事件の立役者だったという話でした。特に刀折れ矢尽きてのちも矛をおさめなかつた、初志貫徹を誓う最後の抵抗組の劇的な話には、胸のつまるほどの感動を受けました。

それは風布地区、いまは長瀬町になつていますが、この風布耕地から

出陣した一隊は特に団結が強く、最後まで抵抗し犠牲が多かつたので、戦いの後も誇り高いものを持っていました。官憲の目を逃れて、主領の田代英助に対してさへ批判の矢を向けられる程だったので。ところがいつたん刑場の露と消えた首領への、ねんごろなわけは、いまに人々の胸をうちます。それは、刑死した遺体が風布峠を通過したとき、全員が整列し泣きながら、手から手へと遺体を渡し、丁重な野辺の送りをするという話です。

女も男も村をあげて、この素朴な民衆の魂が触れ合うところに、真に変革のエネルギーが生まれ、人間集団としてのゆとりと、明るさをおびてくることでしょう。

分科会で学んだもの

この大会では例年より一分科会が増置され、その参加者は二、三〇〇名の多勢となりました。特に第二の青年の読書活動分科会の集まりは、五二二名というマンモス分科会となり世話役は大変でした。

第一分科会：まず障害者サービス

分科会では、障害者へのきめこまやかな図書館サービスをめぐる討論となりましたが、その結果、この図書館大会の名において、現在の著作権法の不備を改正するよう関係機関へよびかけることとなり、まず文化庁の中に、障害者をまじえたこの検討の場を設定すること、またあわせて文部省でも社会教育の立場から、このような検討の場を設定することを要望したのでした。障害者サービス上、自由に録音し、きかせることについて限度があり、これを自由にできるようにする、更に文字の拡大、字幕入りフィルム、著作等の録音以外の障害者サービス関係の著作権法の条項を、あらためて検討し、障害者の「読書権」を妨げないようにすること等を決議しました。

第二分科会：児童・青少年の読書を考える分科会では、読書をより広い教育的な視野から、ゆとりある教育の場づくりのあり方を求め、すべての子供たちに、読書との出会いを深めるよう、学校図書館、公共図書館、文庫が一層の連絡をとり合い、ややもすると活字ばなれが高まりつつある子供たちに、厚い読書環境づくりをと、あらゆる角度から話し合いました。

第四分科会：公共図書館分科会では、公共図書館のネットワーク作りについて議論を傾け、特に川口市の地域内図書館間のネットワークの展望として、四館並列館としての共通サービスと機能分担、各館を窓口とした一定水準の保持、サービスの均等化、電算システムによるオンライン化と連絡協力車による濃密な運行であり、またそれに加え全県的な立場からは、県立四館を地域の核とする、所管内各図書館間の相互協力化の達成など熱心な討議が展開されました。

第一〇分科会：出版流通の分科会では、国際標準図書番号(ISBN)の広い視野からの話は別として、地方出版物の情報、流通については、地域図書館として最もふさわしい、それらの特色づけのひとつとして、地方出版物を計画的により多く収集し提供することを、大きな使命としたという強い発言もありました。そのためには、「日本全国書誌、地方出版物の部」を、各図書館とも大いに活用し、地方出版の発展を図らなければならない、というまとめとなりました。

(Y)

埼玉の文学 歌人とその作品

・▼4▲

◆杉浦翠子(明18・5・17 - 昭35・2・16)

・我が背子はいづちに旅の宿からむ灯ともし頃となりしものを
・迫りせまりて渚にたたみよる波のひとつら白し崩るる前を

杉浦翠子(すぎうら・みどり)は川越市に生まれた人で、母の実家は、甲斐の武田信玄の子、勝頼の妹の血すじをひく荒子の岩崎氏であったということ。翠子は七人兄妹の末っ子で、幼いころに両親を失って祖母の手で育てられ、高等小学校を卒業します。その後、兄の桃介が福沢諭吉の次女の養子婿になっていた東京の家に引き取られ、実践女学



在りし日の杉浦翠子

校に通学しますが、学校よりも上野の図書館にかよって文学書を読みあさってすごしたため、家庭内で花嫁修業をさせられることになってしまっています。そのあたりの事情をふくめて、翠子の生涯のことは、吉屋信子著「ある女人像」近代女流歌人伝(朝日新聞社刊)のなかの「浅間は燃ゆる」にくわしく書かれています。二十歳のころ、わが国の初期商業デザイン界に指導的役割を果たした図案画家、杉浦非水氏の夫人となりました。大正四年ごろ北原白秋の門に入りましたが、まもなく「アララギ」に転じて斎藤茂吉に師事、更に古泉千樞にもつきまじりましたが、大正十二年には事情で「アララギ」を離れて白秋系の「香蘭」に入社、昭和八年には独立してみづから「短歌至上主義」(戦後に復刊のとき「短歌至上」と改題)を創刊、主宰します。情感到富んだ作風の人で、「アララギ」の写実を経て、独自の主知的な硬質の叙情を築いたといわれています。歌集には「寒紅集」(大6)、「藤浪」(大10)、「みどりの肩」

(大14)、「浅間の表情」(昭12)、「生命の波動」(昭27)などがありまた歌論を加えた歌文集に「朝の呼吸」(昭3)、「小説に「かなしき歌人の群」(昭2)などがあつて、多彩な活動をみせました。著書のうち第一歌集「寒紅集」は、筑摩書房版「現代短歌全集」第三巻に収録されています。(名前の読み方は事典によつて「すいこ」となっています。)

◆山本剛(明39・2・28 - 昭51・1・26)

・風のなか陸橋渡る怒ることすくなくなりし肩を落として
・雨の降る夜のあたたく隣家に赤児生れし話聞きをり

山本剛(やまもと・たけし)は山梨県出身でしたが、長く浦和に住んで作歌活動をつづけました。昭和三十六年に定年退職するまで読売新聞社に勤め、浦和支局長をしたこともあります。歌人としても人一倍努力の人で、若いころに作歌を始め、「みづがき」「鶏苑」「砂廊」「作風」を経て独立、晩年のころは殿岡牧太と共に「交流」を創刊、主宰していました。「交流」終刊後は「みづみ」「実生」にも作品を発表しています。昭和三十四年に第一歌集「山青」を出し、五十年には第二歌

集の「荒城」をまとめましたが、荒城(あらき)とは死者を祭ることであり、みづからの死を予測したかのような書名で、翌五十一年一月に病気のため亡くなったのでした。



(右) 中里清歌集「檀の下」
(左) 山本剛歌集「荒城」

・惜しまるる人急ぎ逝く世の隅におろかにわれは生き残りつつ
・「荒城」のなかの作品ですが、作風は写実的で重厚、人柄のおのづから現れた骨格の正しい作品を見せていました。晩年は地元紙の埼玉新聞

にしばらく籍をおいたあと、浦和市立領家公民館長をつとめ、「老人文学としての短歌を確立させたい」と語って、後輩の作歌指導に尽力していましたが、多くの人々に惜しまれながらの急逝でした。昭和二十九年

河野多恵子氏を迎え 盛りあがりをもて 第三回「本を読む県民のつどい」

読書の秋にふさわしい恒例の行事となった埼玉県教育委員会、埼玉県立図書館、埼玉県図書館協会主催による「本を読む県民のつどい」は、本年度第三回目。本庄市立図書館の開館を記念して、同市中央公民館を会場に、十一月十九日(木)午後一時より開かれました。

会場には、本庄市を中心とした県北の市民、特に主婦の姿が目立ち、小じんまりとしたホールは、ほぼ満席の状態でした。

担当館である県立熊谷図書館上岡館長の開会あいさつによって始められ、県教育長代理沼尻教育次長、県図書館協会高橋会長の主催者あいさつ、県知事、県議会議長、本庄市長の来賓祝辞があつて、別記のような二十名の読書感想文入選者の表彰が



本を読む県民のつどい

いふ電話に妻の声のはずめる。木ざらしのままだに霜にいくたびかあひたる柿の味良くなりぬ。中里清(なかざと・きよし)は寄居町牟礼の内田家に生まれました。大正九年春、埼玉県師範学校を卒業

読書感想文の入選者

青木雅子(所沢市)・浅見薫(妻沼町)・石井安子(妻沼町)・漆原恵美(与野市)・大橋喜美(川口市)・柏木黎子(浦和市)・栗原和彦(入間市)・杉浦京子(川越市)・田中富美子(川越市)・奈尾美代子(川口市)・中村和枝(幸手町)・中根昭子(川越市)・夏目文江(川越市)・野本智恵子(川越市)・福田喜久江(飯能市)・藤本新子(浦和市)・守山邦子(川越市)・柳川利光(戸田市)・山下すみ江(鶴ヶ島町)・横田直二(上尾市)

して花園小学校に勤めますが、わずか一年で鉢形小学校に移り、昭和三十四年に退職するまで、同じ学校に勤めた人でした。昭和五年に結婚して中里家の人となり、昭和十三年からは校長となつて、土地の教育に熱心な、郷土史研究者としても知られていました。郷土史の本としては、『武蔵鉢形城』(昭27)、『鉢形城と郷土文化』(昭43)などの著作があります。

鳥塚仁、内田義氏らと共に地元で青樹歌会を作り、歌人としての活動も盛んでした。昭和三十年、第一歌集『刈穂』、四十二年第二歌集『朝の道』を刊行、没後の昭和五十一年には、夫人と友人たちの手によって遺歌集『恒の下』(まゆみのもと)が発行されました。昭和三十四年には、歌の校長さんの歌碑を作ろうというので、校庭に次の一首を刻んだ歌碑が建てられています。

・砂場つくれば砂にまみれて遊びある小ききものに吾もまじれり

歌風は昭和六年に入会した「青垣」の同人らしく、実人生を基盤とした質実な作品が多く、『恒の下』には昭和三十七年から四十九年までの約千五百首が収められています。

東西南北

冬休み子供映画会■1月6日(水) 13時30分 「吉四六ばなし」吉と助とふるさとをー他(県立久喜) 新春親子映画会■1月7日(木) 10時・14時 「空とボマウス」・「トムソーヤの冒険」他(県立川越) 映画会■1月8日(金) 12時15分 「奥の細道」(県立熊谷) ボビュラー・コンサート■1月8日(金) 13時30分 新譜紹介(県立久喜) 映画の集いー名作映画会■1月9日(土) 10時・14時 「春男の翔んだ空」(県立川越) 冬休み子供映画会■1月12日(火) 13時30分 「夕焼けのマイウェイ」(県立久喜) カセットによる文豪の声■1月13日(水) 12時15分 文学の心ー文豪は語る(県立熊谷) 科学文化映画会■1月20日(水) 14時 「世界の屋根の子どもたち」・「ナディアの願い」他(県立川越) 科学文化映画会■1月21日(木) 14時 「日本のエネルギー」他(県立川越) クラシック・コンサート■1月22日(金) 13時30分 ベートーヴェン交

響曲第七番他(県立久喜) レコード・コンサート■1月30日(土) 13時30分 「シルクロード」シンセサイザー・喜多郎(県立熊谷) 名画鑑賞会■1月30日(土) 10時・13時30分 「陽のあたる坂道」(県立久喜) ボビュラー・コンサート■2月5日(金) 13時30分 新譜紹介(県立久喜) 映画の集いー名作映画会■2月6日(土) 10時・14時 「涙をたらした神」(県立川越) 映画会■2月9日(火) 13時30分 「あらいぐまのいたずら日記」(県立久喜) レコード・コンサート■2月10日(水) 12時15分 「日本民謡のすべて」(県立熊谷) 映画会■2月12日(金) 12時15分 「石油不足時代を迎えて」ーエネルギーと私たちー(県立熊谷) 映画の集いー国際障害者年によせてー■2月18日(木) 14時 「愛のかけはし」他(県立川越) ■2月19日(金) 14時 「あしたは青空 ある聴覚障害児の生活記録」(県立川越) クラシック・コンサート■2月19日(金) 13時30分 リムスキー・コル

★県立図書館の利用時間は……

開館時間		休館日	
貸出閲覧・調査相談(一般書)	9:00~19:00	月曜日(月曜日が祝日の場合は火曜日)	国民の祝日 年末・年始 (12月27日~1月5日)
〃(児童書)	9:00~17:00	土曜日・日曜日	
対面朗読(川越・久喜)	9:00~17:00	開館記念日(4月1日・10月1日・6月3日)	
視聴覚	9:00~17:00	日曜日	
移動奉仕	9:00~12:00	土曜日	

埼玉県立浦和図書館
〒336 浦和高砂3-1-22
☎0488-29-2821

埼玉県立熊谷図書館
〒360 熊谷市箱田5-6-1
☎0485-23-6291

埼玉県立川越図書館
〒350 川越市新宿町1-17-1
☎0492-44-5602

埼玉県立久喜図書館
〒346 久喜市下早見85番地
☎0488-21-2659

図書館の周辺



文学散歩

「新しき村」を訪ねて

— 県立図書館文化事業 —

秋雨の降る十月八日(金)、入間郡毛呂山町で県立図書館主催の第三回県内文学散歩が、八十余人の参加者のもとに行われました。

今回の文学散歩は、武者小路実篤先生の理想郷「新しき村」を訪ね、先生をしのぶことと、流鏑馬で有名な出雲伊波比神社を見学し、郷土の歴史を再発見しようと計画したものです。

新しき村には、

「この道より我を生かす道なし」と書かれた樺の角柱があります。これは、昭和二十八年十一月十四日、新しき村三十五周年記念に実篤先生が書かれたものです。

ここでは、通称「村長」の渡辺貫三氏から、村の草創期の苦労話や、実篤先生の村への献身の様子など心を打たれるお話がありました。

村内には、村の創立六十周年記念事業として昨年開館した美術館があります。実篤先生の書画が展示され、



新しき村増田荘にて

図書室には先生の著作のほか、村の図書が公開されています。参加者は、先生の書画にじかに接することができ、文学作品を通して、それぞれに描いていた文豪その人となり、より身近に感じられたようでした。

途中、秋の鎌北湖で休憩をとり、

午後は、延喜式(九〇七年)神明帳に、武蔵国入間郡五座の筆頭としてその名が見られる出雲伊波比神社を見学、毛呂山町文化財保護審議委員の小川喜内氏から神社縁起や流鏑馬についてのお話をうかがいました。

以上が、今回の文学散歩の概要ですが、何よりもこの日が雨天であったことが残念でした。しかし、参加者の感想文の中に

雨の鎌北湖の静寂もまた良しの一文をみつけ、ほっと胸をなでおろしたものでした。

本庄市立図書館



市民待望の新図書館が去る七月三十一日完成し、読書の秋十一月十日オープンいたしました。

新しい図書館はこれまでの図書館の跡地で同館の北側は本庄市立の小・中学校もあり静かな環境に位置しております。

○建物鉄筋コンクリート地下一階地上三階建延面積二、五六〇平方メートル
○一階 一般開架室、児童室、プラウジングコーナー、円形劇場、新聞雑誌コーナー、婦人実用書コーナー、身障者用エレベーター、事務・作業室、BM車庫
○二階 読書室(九六人収容)、レファレンス室(資料八、〇〇〇冊、キャレデスク十四席) 視聴覚室、資料展示室
○三階 集会室(二〇〇人収容)、小会議室、対面朗読室、閉架書庫(四万冊収容)
○地階 機械室、倉庫
○蔵書数 約五万二千冊
○休館日 毎週月曜日 館内整理日

(毎月末) 祝日 年末年始、特別整理日
○特色
○一階児童室の一隅に円形劇場が備えられ子どもに対する読みきかせのほか紙芝居、人形劇もできるよう配慮されております。
○一階一般開架室の南側庭園を望む環境のよい場所にプラウジングコーナーが設けられ、ゆったりとして軽読書が出来るよう配慮されております。
○休館日 閉館後でも図書の返本が出来よう玄関脇にブックポストが設けられ利用しやすいようになっています。
○身体の不自由な方のために玄関スロープ、自動ドア、エレベーター、身障者用トイレ、書架間隔をとり車椅子でも利用出来るよう配慮されております。
以上が新しい図書館の概要ですが、この近代的な建物にふさわしい図書館運営を行うべく努力いたしております。



埼玉の市町村史

最近、書店に足を運ぶと「郷土誌コーナー」というのをよく見かけますが、昨今の歴史ブームを反映してか、いわゆる郷土ものが全国的に静かなブームを呼んでいるようです。自分が生まれ育った土地が、どのような歴史をたどり、そこで先人たちがどのような文化を創造し、維持し、発展させてきたかを知るにより、改めてふるさとへの愛着を深め、認識を新たにすることが出来るわけですね。

埼玉県でも多くの市町村が、市町村史の編さん事業に活発に取り組んでいます。ここで、それらをすべて紹介することはできませんが、今回は、ここ数年間に発行されたものの中から、各県立図書館で所蔵しているものをいくつか紹介してみたいと思います。

記載の内容は、各郡別に以下の順になっています。
資料名、編(著)者、発行年、所蔵館名

〔北足立郡〕

川口市史 古代・中世資料編(浦・熊・川)

川口市編 昭和53・55

浦和市史 考古資料編 古代中世資料編Ⅰ・Ⅱ 近代資料編 近世資料編Ⅰ・Ⅱ 民俗編

浦和市総務部市史編さん室編 昭和49・56

大宮市史 1・3・5巻 1考古編 2古代・中世編 3(上)近世編 3(中)中・近世編 3(下)近代地誌編 5民俗・文化財編資料編1・2

大宮市史編さん委員会編 昭和43・53

※3(上)・資料編2は川越になし

与野市史 民俗編 近代史料編 与野市企画部市史編さん室編 昭和55・56

(浦・熊・川・久)

戸田市史 資料編1

戸田市編 昭和56

(浦・熊・川・久)

志木市史 民俗資料編Ⅱ

志木市編 昭和56

(浦・熊・川・久)

桶川市史 2原始・古代資料編

桶川市編 昭和54

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

吹上町史

吹上町史編さん委員会編 昭和55

(浦・熊・川・久)

〔入間郡〕

川越市史 1・4・5巻 1原始・古代編 4近代編 5現代編Ⅰ 史料編(中世1・2 近世1・3) 民俗編

川越市総務部市史編さん室編 昭和47・55

(浦・熊・川・久)

所沢市史 近世史料Ⅰ 中世史料 地誌

所沢市史編さん委員会編 昭和54・55

(浦・熊・川・久)

飯能市史 資料編1・4

飯能市史編さん委員会編 昭和51・54

(浦・熊・川・久)

※浦・熊1・3、久1・2・4あり

坂戸市史 中世史料編2

坂戸市教育委員会編 昭和55

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

〔秩父郡〕

小鹿野町誌

小鹿野町誌編集委員会編 昭和51

(浦・熊・川・久)

皆野町誌 資料編Ⅰ・Ⅲ

皆野町誌編集委員会編 昭和55・56

(浦・熊・川・久)

大滝村誌 資料編1・7

大滝村誌資料調査委員会編 昭和46・54

(浦・熊・川・久)

※6は久喜になし

荒川村誌 資料編(近世・近代)

荒川村誌編さん委員会編 昭和52・54

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

(浦・熊・川・久)

【北埼玉郡】

加須市史 通史編

加須市史編さん室編 昭和56

羽生市史 上巻別冊

羽生市編 昭和53

羽生市史 上・下 追捕

羽生市史編集委員会編 昭和46・51

(浦・熊・川・久)

【南埼玉郡】

岩槻市史 近世史料編1・3 (上・下)

植物編

岩槻市編 昭和55・56

春日部市史 3 近世史料編I・II

春日部市教育委員会史編さん室編 昭和53・55

越谷市史 通史上・下 史料1・4

越谷市編 昭和47・56

八潮市史 史料編 (近代1 別巻)

八潮市編 昭和54

【北葛飾郡】

葛飾町史 史料1・2

葛飾町編 昭和55・56

(浦・熊・川・久)

なお、今回は紹介できませんでしたが、この他にも、年表類、調査報告書類、写真集などがあり、これらについても積極的に収集しています。詳しくは、各県立図書館にお問い合わせください。



■ 編集後記 ■

混とんのうちに明け暮れた一九八一年も、ようやく輝かしい新春を迎えることができました。皆様あけましておめでとうございます。編集子一同も、今年こそは良い年であるよう覚悟をあらたにしていますので、今年もよろしく願っています。さて昨年中のひとりの山場でもありましたが、全国図書館大会も予想以上の成果を収めましたので、一九八二年への跳躍台になればと思います。ここに回顧してみました。

また歌人とその作品も十号にも掲載することができ、埼玉の文学風土の厚さの再認識に役立っているものと思います。今後のご協力を切にお願いいたします。

最近利用者がますます多くなったためか、特に日曜日による図書館への問い合わせが非常に多く当番はうれしい悲鳴をあげています。そこで大変失礼とは思いましたが、このお答えを五頁下段に登載しましたのでぜひ一読を。

秋たけなわの読書の秋に開催の「本を読む県民のつどい」も年々盛大となり、合せて行いました読書感想文の募集にも沢山の応募者がありました。その中で立派なできばえの方々二〇名の入選者について、四頁にその栄をたたえて登載させていただきました。

おたすねください

竜勢のしくみ

問 埼玉の奇祭として吉田町に竜勢というのがあるが、そのしくみを知りたいのですが？

答 松材を二つ割りにし、底を残し円筒形にくりぬき、竹のタガで締める。火薬は炭10、硝石2の割合で水を加えて煮つめ、すりつぶし、別にすった硫黄を1の割でまぜ、水気を加える。穴に筒を立て、底に粘土をつめ、その上に一回百匁(375g)

位の火薬を入れ、キメ棒を立て掛け矢で300〜400回打込む。適当な湿気を加えながら、繰返す。筒上部の吹つきり口から親糸、子糸をさし込み最上部を粘土で固める。筒の底を一寸五分(約5cm)程の穴をあけ漏斗状に火薬を削り、口火をう形にさし込み、もやし(火薬を水で弱めて団子状にしたもの)できめ、底に和紙をはる。口火は打上げやぐらに掛けた時、しのび(導火)を取り付けけるものである。筒は

青竹の矢柄の元口にしばり付け、大ききに見合った唐傘などのショイモノをつける。でき上った竜勢は白木綿で包み、ご幣を立て、人形その他さまざまな造り物を飾る。ショイモノの傘は上空に昇りきる寸前、親糸、子糸が焼き切れ開くように仕組まれる。「資料」秩父 祭と民間信仰 浅見清一郎著 有峰書店 埼玉県民俗芸能誌 倉林正次 著 錦正社